

## 「報復の日—神の怒りから逃れよ」

ルカ 21:20-24

2020.10.18 南与力町教会朝拝

### 序：終末的な出来事としてのエルサレム滅亡

イエス様の終末に関する説教を学んでいます。そして今日の箇所ではエルサレム滅亡について語られています。エルサレムの滅亡は紀元 70 年に起こったことであり、私たちにとっては過去の出来事です。それゆえ自分たちとはあまり関係のない出来事と考えてしまいがちかもしれません。しかし注意したいことは、イエス様はエルサレム滅亡を終末的な出来事として捉えておられたということです。それは必ずしもエルサレムが滅亡すれば、すぐに終末(世の終わり)が来るということではありません。イエス様も今日の箇所の最後、21 章 24 節の後半で次のように語っておられます。

「異邦人の時代が完了するまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされる。」

すなわち、エルサレムが滅亡してから、世の終わりが来るまでの間には「異邦人の時代」という時代があるということです。それゆえエルサレム滅亡は必ずしも時間的に終末に近いわけではありません。しかし性質としてそれは終末的な出来事であるということです。それは言い換えるなら、エルサレムの滅亡は来るべき終末に起こることの予表、それを予め表わす出来事であった、ということです。

そのように考えると、私たちはこのエルサレム滅亡を自分たちとは関係のない単なる過去の出来事と捉えるべきはありません。むしろそこでは一体何が起こったのか。なぜそのようなことが起こったのか。そしてもし終末に同じようなことが起こるのだとすれば、私たちはどうすればよいのか、どのように備えるべきなのか。そのようなことを私たちはこの御言葉から学び取る必要があるのです。

### ①エルサレムの滅亡（荒廃）を悟り、そこから逃れよ（21:20-21）

イエス様はまず次のように言われました。21 章 20～21 節。

「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ち退きなさい。田舎にいる人々は都に入ってはならない。」

イエス様はなぜこのようにわざわざ言われたのでしょうか。一つにはエルサレムは城壁で囲まれていたということがあります。他の町には城壁などありません。ですから戦争になったときにユダヤ人たちは城壁のあるエルサレムの中に逃げ込んだのです。しかし理由はそれだけではありません。多くのユダヤ人たちはエルサレムが滅びないと信じていたようです。もちろんエルサレムもかつてバビロン捕囚の際に一度滅びています。しかしその後もユダヤ人たちにとってエルサレムは特別な場所であり続けました。その中心には神殿があり、神殿は神様をご臨在なさる場所です。それゆえエルサレムには神様が共にいてくださり、神様が守ってくださるという信仰があったのです。そして実際ユダヤ戦争が起こった際には多くのユダヤ人がエルサレムへ逃げ込んだのでした。

しかしイエス様は「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ち退きなさい。田舎にいる人々は都に入ってはならない」と予め警告なさっていたのです。エルサレムが軍隊に囲まれ

るの見たも、エルサレムは滅びないと信じてその中に入ってはならない。むしろそこから出て行くように。ユダヤにいる人々は、エルサレムではなく、山に逃げるように、おっしゃっていたのです。そして実際、エウセビオスという人が書いた「教会史」という書物の中には、エルサレム教会の人々は、ガリラヤ湖の南、ヨルダン川の向こう側にあるペラという山に逃げて助かったということが記されています。多くのユダヤ人たちがエルサレムに立てこもる中、エルサレムにいたキリスト者はイエス様の言葉に従ってエルサレムではなく、山へ逃げることで救われたのです。

## ②神の怒りによるエルサレムへの裁き (21:22-24)

しかし、なぜ神の聖なる都であるはずのエルサレムが滅びてしまったのでしょうか。なぜ神様はユダヤ人たちが信じていたようにエルサレムを守り、救われるということをされなかったのでしょうか。

イエス様は 21 章 22 節で次のようにおっしゃっています。

「書かれていることがことごとく実現する報復の日だからである。」

「報復の日」とは神が悪に報いられる日、罪に対して裁きを下される日、ということです。そしてその日は聖書（旧約聖書）に書かれていることがことごとく実現する日だと言われています。旧約聖書にはエルサレムに神の裁きが下り、荒廃することが記されています（例えばダニエル書 9 章 26-27 節）。

そういったことがすべて実現する報復の日、裁きの日が来るということです。さらに 23 節には

「それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。この地には大きな苦しみがあり、この民には神の怒りが下るからである」と言われています。

妊娠中の女性や乳飲み子を持つ女性はその時に逃げ遅れてしまうということが示唆されています。

「この地」、すなわちユダヤの地には大きな苦しみが臨みます。この「苦しみ」という言葉は「必然」という意味もあります。すなわちこれからユダヤの地に下る苦しみは偶然起こることではなく、必然的な苦しみ、必ず受けなければならない苦難だということです。そして「この民」、イスラエルの民には神の怒りが下るのです。すなわちエルサレムの滅亡、そこでの大きな苦難は神の怒りによって起こることなのです。ですから、そのときにいくら神の奇跡的な介入や助けを期待しても、それは与えられないのです。そして最後の 24 節には次のようにあります。

「人々は剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれる。異邦人の時代が完了するまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされる。」

かつてのバビロン捕囚と同じようなことが再び起こるのです。ヨセフスの「ユダヤ戦記」によれば、エルサレムで殺されたユダヤ人は 110 万人、捕虜となって連れ行かれた人は 9 万 7 千人と言われています。その数字はかなり誇張されたものだと言っていますが、おびただしい数のユダヤ人が剣に倒れ、捕虜となって連れていかれたことは確かです。

一体なぜこのような厳しい裁きがエルサレムには下されたのでしょうか。エルサレムの人々はどのような悪や罪を犯したのでしょうか。そのことについてイエス様はこれまでに語っておられました。ルカ福音書 13 章 33 節、34 節

「だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。」

神様はご自分の預言者を繰り返しエルサレムに遣わしてこられました。しかしエルサレムはその預言者たちに耳を貸さず、殺してきたのです。そして神様は最後にご自分の独り子イエス・キリストを遣わすのですが、エルサレムの人々はそのキリストをも拒み、十字架につけて殺してしまったのです。主が何度も「めん鳥が雛を羽の下に集めるように」招いたにも関わらず、エルサレムはそれを頑なに拒み、応じようとはしなかった。それゆえに神の怒りと裁きを受けなければならなかったのです（ルカ 19 章 42-44 節も参照）。

しかしそれはイエス様、そして神様の本来の御心・願いではありませんでした。それはイエス様がエルサレムのために嘆いておられることからわかります。今日の箇所でもイエス様は「身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ」とおっしゃっていますが、この「不幸だ」という言葉はその人のことを思うと何と悲しいことか、という嘆きの言葉です。このような嘆きの背後には、本当はそのような苦しみを味わってほしくないというイエス様の愛と憐れみの心があります。しかしエルサレムはかたくなに主の招きを拒み続けてきたがゆえに、最終的には神の怒りと裁きが下らなければならなかったのです。

### ③異邦人の時代が完了するまで

しかしエルサレムが味わう苦難もいつまでもということではありません。24 節の最後には「異邦人の時代が完了するまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされる」と言われています。エルサレムは破壊され、異邦人に踏み荒らされるが、それは「異邦人の時代が完了するまで」のことだ、ということです。その後にはエルサレムが回復されることが示唆されています。

第二次世界大戦後、1948 年にイスラエル国が建てられました。イスラエルの人々はエルサレムが首都であると主張していますが、国際的には認められていません。エルサレムには今なおイスラム教の聖所である「岩のドーム」が建っています。ユダヤ教のものといえばエルサレム神殿が破壊された後に残った「嘆きの壁」しかありません。それゆえ、今もエルサレムは異邦人に踏み荒らされている状況と言えるでしょう。しかしそれも「異邦人の時代が完了するまで」と主イエスは言われるのです。では「異邦人の時代」とは何を意味しているのでしょうか。第一に考えられることは異邦人がエルサレムを支配している時代ということです。しかしそれだけではなく、この言葉には「異邦人に救いが向けられていく時代、異邦人宣教の時代」という意味もあると思われます。そのことはルカ福音書の続編である使徒言行録を読むとわかってきます。使徒言行録 13 章 46 節、47 節をお読みいたします。パウロたちはまずユダヤ人たちに福音を宣べ伝えました。信じる人もいましたが、多くのユダヤ人はかたくなに信じようとはせず、パウロたちに反対をしました。そのときパウロは次のように語ったのです。

「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。主はわたしたちにこう命じておられるからです。『わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、／あなたが、地の果てにまでも／救いをもたらすために。』」

また使徒言行録の最後の章である 28 章 28 節にも次のようにあります。

「だから、このことを知っていただきたい。この神の救いは異邦人に向けられました。彼らこそ、これに聞き従うのです。」

ユダヤ人たちが福音を聞いてもかたくなに信じようとしないうち、神の救いは異邦人に向けられた、と

言われています。神の救いは、まず神の選びの民であるイスラエルに向けられました。イエス・キリストはイスラエルに来られたのです。しかしイスラエルがその救いを拒んだことによって、その神の救いは異邦人への向けられることになった。今はそのような「異邦人の時代」です。その中で私たち異邦人のところにも神の救いの福音が届けられたのです。

### **結論：来たるべき神の怒りから逃れよ**

しかし、その異邦人の時代もいつまでも続くわけではありません。その時代も完了する時が来るのです。その時には異邦人も裁きが下ることになります（ルカ 21:25-26 参照）。神の救いを拒んだイスラエルに裁きが下ったように、自分たちに向かれた救いを異邦人が拒むならば、同じように異邦人にも神の裁きが下ることは避けられないでしょう（第二テサロニケ 1:8）。

しかし今日の箇所ではイエス様は「そこから逃れよ、来たるべき滅びに巻き込まれるな」と呼びかけてくださっています。ではどうすれば来たるべき神の怒りと裁きから逃れることができるのでしょうか。エルサレムのキリスト者たちはエルサレムではなく、キリストの言葉を信じて、山に逃げて救われました。それと同じように私たちもこの世のものではなく、キリストを信じ、キリストの言葉に聞き従うならば、来たるべき怒りから救われるのです。神の怒りは私たちの罪のゆえに下りますが、キリストはその私たちの罪のすべてを負って十字架上で死んでくださいました。ですからこのキリストに依り頼み、キリストの御翼の下に逃れる者は、来たるべき神の怒りと裁きからも守られ、救われるのです。そのようにイエス・キリストは今も私たちに呼びかけてくださっています。